# 研究資料

## 鳳凰堂本尊納入修理關係資料

毛利久

平等院鳳凰堂の本尊阿彌陀如來坐像の胎内には、蓮臺付阿彌陀大小咒圓板とともに、次に記するような修理關係資料が一箇の桐箱に封入して納置されていたことが、今般の同像修理に際して明かにされた。それは江戸時代および明治期のものではあるが、平等院研究の資料として看過すべきでなかろうから、ここに略解を附して、その内容を紹介しようと思う。原文を活字化するに際しては、異體の文字を普通體に改めたものも多いことを斷っておく。

（以下・印ある文字は原文のまま）

(1) 箱　一箇

桐製、竪一尺一寸五分、横四寸四分、高二寸七分、棧蓋。もと身と蓋は木釘で嚴封され、そのなかに以下にあげる寛文十年の修理關係物件が納置されていたが、明治二十八年の修理にこれを開けて、その際の記録を納め、身と蓋を紙で目張りして、蓋表面にその由を記した紙を貼つたもののようである。

（蓋表面墨書）

上

明治廿八年四月十五日封瓆之

平等院

管理

（貼紙、四隅ニ「平等院」ノ朱文圓印アリ）

（蓋裏面墨書）

寛文十庚戌年

平等院拾二世念蓮社專譽俊童上人

五月十九日

（身底面内側墨書）

延久六年申寅

平等院開碁大政大臣藤原頼通蓮華覺俊寂覺居士

二月二日

(2) 佛說阿彌陀經　一卷

紺紙金書、竪一尺、總横十一尺六寸八分（うち本地十尺八寸七分）、本地の紙數七枚、界の高七寸五分五厘、一行幅七分、水晶軸。表紙（紺紙）に散華を金泥描きして、「ゟ佛說阿彌陀經」の題字の下に「檀譽息音」と署名される。表紙の裏（見返）は布目摺出金泥塗の紙で裏張りされ、そこに雲上來迎形の阿彌陀如來坐像一體が墨描きされる。本地の劈頭に「一字三禮之御經」と書かれ、次に經文、奥に次記の跋がある。本經は慶安五年十一月三日平等院方丈第九代檀譽書寫。下揭の奉加帳にも當經についての記載あり、それによれば檀譽は勸進上人專譽の先師にあたるから、その因緣によつて納入したのだろう。

（奥跋）

選擇集曰龍舒淨土文云襄陽石刻

阿彌陀經一心不亂而下云

專持名號　以稱名故　諸罪消滅

卽是多善根　福德因緣　廿一字

旨慶安五壬辰年

拾一月三日息音（花押）

平等院方丈第九代之叟栴蓮社
檀譽龍極上人大和尚（六十九才書之）

南無阿彌陀佛　衆生稱念
必得往生
奉爲上達法身　下及衆生
乃至法界　平等利益
報恩謝得之抽無二丹精無双白善也（カ）
三寶知見　諸天納受
回向無上大菩提
一心頂禮萬德圓滿釋迦如來身心舍利本地
法身法界塔婆我等禮敬以我現身入
我々入佛加持故我證菩提以佛神力
利益衆生發菩提心修菩薩行同入圓寂
平等大知今將頂禮南無釋迦如來遺身
舍利深重誓願彌陀世尊南無釋迦如來
遺身舍利臨終正念往生極樂南無釋迦
如來遺身舍利自他法界平等利益
南無釋迦牟尼佛　惣廻向　息音
都合三拜
六千五百六十七禮　□□（花押）

(3)　漆箔斷片　一箇

最長二寸一分五厘の細長い斷片、一枚の楮紙（竪七寸八分、横五寸六分）に包まれる。下張の布の糸がやや太い。何の破片かよく判らないが、奉加帳にいう「昔賴通之時莊嚴」の一つに該當すると思われる。

(4)　天蓋斷片　三箇

一は圓板（徑一寸）にゆるやかな凹面をもつ身部破片のついたガラス製品で、薄青色、かなり大きい氣泡がみられる。二は最長六分の不整形なガラス製品斷片で、ゆるやかな凹面の方に截金文様（圖文不明）の痕迹を認める。色は黄をおび薄青色、小さい氣泡が殘る。三は不整形な銅溶片の如きもので、最長一寸八分。現存の鳳凰堂天蓋にかような莊嚴があるかどうかは未調査。三點ともに下記の墨書ある一枚の楮紙（竪七寸六分、横五寸）に包まれる。これも(3)の漆箔斷片と同様の奉加帳記載のものにあたるようである。

（包紙墨書）
天蓋之道具昔之皆損而莊之
道具無之多クスタレタルヲヒロイ少シ納
置也

(5)　鳳凰斷片　一箇

銅製、最長三寸五分。鳳凰堂中堂の大棟兩端に立つ鳳凰の破片（尾の部分？）と考えられる。これも奉加帳に明記されている。次の墨書のある一枚の楮紙（竪七寸六分、横六寸四分）によつて包まれる。

（包紙墨書）
鳳凰鳥以レ爲ル損直時損（キスル）故
其金之道具也

(6)　宇治平等院奉加帳　一帖

紙本摺書並に墨書、折本裝、竪九寸二分、横三寸五分、本地の紙數十三枚。表紙は紺染、キラ引きの題紙が二重に貼られていて、下のものは單に「奉加帳」と木版摺されているのに對して、その上に重ねられた方は「宇治平等院奉加帳」と詳記された木版摺であるから、訂正して貼直したものであろうか。本地は雁皮紙、木版の界線は高八寸一分、一行幅七分、後半の奉加記載欄には右界線のほかに天地間の中央横に通して一線を引く。内容は最初に寛文八年五月吉日平等院沙門專譽の勸進狀を木版摺とし、そのあとの奉加記入欄の紙面を利用し

て、この際の修理の詳細な経緯を記録する（寛文十年五月専譽筆）。これらによれば平等院は寛文十年に修理されているが、その委細は勿論のこと、當時における平等院の狀況や鳳凰堂關係の寺傳も色々しるされていて、私たちの注意をひくところがすくなくない。

勸　進　沙　門　　敬白

請下持蒙二十方檀那助緣一修二造山城國宇治
鄉平等院廢壞一令上三有緣無緣衆生成二就一
世悉地一勸進狀

夫以佛一閣修一造者諸一善奉一行之最一初也佛一像莊一
嚴者萬一德圓一滿之本一基也因レ茲　考二舊　簿一此平等院
者昔河原左相一府源　融公之別一業而號二宇治院一
陽一成宇多朱雀三代天一子　屢　幸二斯地一遊獵燕飲
其一後一條院御一宇左一大一臣雅信公爲二所一領一長德四
年御堂關白道長公得二此地一常往來彼賢一息宇
治關白賴通公永承七年捨而爲レ寺佛一殿造者唐一
土風一俗而　象二鳳凰鳥一左一右之閣爲レ翼　後背之廊爲レ尾
故號二鳳凰堂一矣鳳凰者有二仁知一其一身有二仁義禮智信
五一字文一其一聲如レ簫　食　有レ義而不レ喙二生虫一不レ折二生一枝一
是菩薩之化一身也仍　標二小一土不レ來惡一國　不レ遊　之靈
鳥一而建一立之一是日本無雙堂一樣也本尊丈六之
阿彌陀如來佛工定朝之所二彫刻一也光中之梵字醍
醐寺之明德成尊僧都書レ之道一場莊嚴磨二摩一尼一
鏤二金一銀一堂一內釋迦八相二十五菩薩之像乘二垂一雲一
列二承一塵一四壁一扉一淨一土九品繪一所長者爲成以二細金一圖一二
畫之一色一紙形文　村上天皇孫　堀一河左大臣源俊房公
之手跡干レ今鮮也庭上湛二泉一水一而摸二一功一德一池一々　形
爲二阿彌陀種字一參詣之貴賤臨二此梵池一者冷一水可
レ濯二無一始罪垢一砌一下一栽二青松一而象二七重寶樹一々　壽　表二
無量壽長生一往一來之道一俗　蔭二其靈樹一淸一風可レ醒二億一
劫熱惱一矣看々境一地冷一々流一水　等二恒何碕一而浪擧二實
相聲一森々林木同二祇樹園一而風出二眞一如一響一矣當レ東有二
一峯一向二本尊眉間白毫一日一輪出二此一岳一映一照彼毫一相一故　呼
レ之云二朝一日一山一恰如二靈一山照干東一方萬一八千一土之化一
儀一然則西天說一法平一等大一會場不レ　異　故號二平等院一
則上一奏而請二僧一侶一修二讀一誦三一昧昔　應神天皇之
王子菟道尊於二末代一爲レ知二　佛法建立地一兼此川一上
構二離宮一至レ今當一寺鎭一守神一社矣治曆三年　忝
上一皇　催二行一幸之儀式一亦寶一藏一一宇納二三國傳來之
佛像經一論及天一下名一器等一落成則天喜元年四月
四日請二百僧一慶レ之平康四年十月廿五日三一重塔
供一養治曆二年十月十三日左大臣師實建一立五一
大一堂一供一養矣亦樓一上之鐘海內奇一物也　諺　曰二相形
平一等一院聲園一城寺一誠　雖二希代靈地奇一異精一舍一至二
末法濁劫一寺產悉落一失僧一侶　漸　退一轉矣此一地度
々戰一場依レ之宇治之人一家雖レ有二炎一燒一鳳凰堂一鐘
樓一樓門一等終不二燒亡一賴通供養時導師語曰因二
此造立一可レ墮一地一獄一如一何者建一立間以二非一理之費一苦二
勞一民一故云レ爾關白感二其　言一役夫賜二身一暇一本願博陸
因二願一心淸一淨一脫二回一祿之失難一自レ　古　至レ今不二燒亡一雖
レ然經二星霜一　簷　瓦　松一生庭　沙　苔茂　上一漏下一濕　不

レ堪ニ東拄西撐之勞率一嗟呼何倫見ニ此廢壞一不レ生ニ
悲心一乎伏乞十一方貴賤千一村男一女同レ志不レ羞ニ一紙
半錢一不レ憚ニ寸一繩尺一木一奉一加有レ之當レ補ニ大一破之罅漏一
不レ聆乎萬一仞之山從ニ一一微一塵一而成千一金裘從ニ獨狐
之腋一而綴不レ見乎檀一施之爲ニ大福田一淘土童子終
昇ニ育王之位一挑レ燈貧一女忽預ニ作佛之記一誰聞ニ此
理一不レ生ニ歎一息一願修一覆功終爲ニ施一者一至ニ供養一執一行
一一千一日別一時念一佛一謝ニ其一報一廻一向群品一爾者捨ニ上國
城之財一下拋ニ筐篚之賂一者依ニ此功一德一理一世安一穩
而中一有遠一行之冥府到ニ安一養不一退之淨刹一者
也仍勸進之趣粗一以如レ件

嘉寛文八申戌年五月吉日

平等院　沙門專譽「俊童」（墨文黑印）「念蓮社」（朱文長方印）

（以上摺書）
（以下墨書）

夫山城國朝日山平等院號而宇治之關白藤賴通公永
承七年佛閣雖レ爲ニ建立一星霜事經ル幺雖レ加ニ廢壞一既及ニ
大破一故六百餘歳經而淨土宗住持專譽俊童修覆之
訴詔及ニ度々一雖レ然先例無レ之故從ニ公芳一者無ニ修覆一故寛
文七年丁未當而將軍家綱公時寺社奉行井上河内守正利加
賀爪甲斐守直證小笠原山城守長賴之以ニ奉行一以ニ奉加一
修覆仕度致ニ訴詔一肝煎者公芳・茶當櫻井宗恩原田
利齋爲ニ兩人一爰平等院者昔爲ニ天台宗一然。天台宗退轉而後淨土宗
眞言宗兩寺院內住眞言宗者文珠院號其後明暦年
中之比最勝院々號名乘淨土宗者明應九年之比平等院
在而別之無ニ寺院名一平等院號兩宗以レ有ニ院內一平等院住持
者眞言宗本與ニ淨土宗本一異論及ニ數年一然所眞言宗最勝
院及ニ滅亡一故以レ緣彼最勝院近比天台宗座主圓滿院成ニ支配一
故淨土宗退一色令レ成ニ天台宗一知略方便樣々儻偈巡成公芳訴
詔・故洛陽知恩住持玄譽知鑑江符・增上寺頓譽知哲平
等院專譽俊童一味同心天台宗退轉之後淨土宗及ニ貳
百年一平等院住持職持此在儀御老中寺社奉行具申入
則知恩院玄譽知鑑者酒井雅樂頭殿忠清井寺社奉行所書簡
遣給故酒井雅樂頭殿知恩院返狀宇治平等院事先規不レ可レ遠
矣此狀什物申請此方有江戸增上寺頓譽知哲者寛文七年八月
廿四日公芳・之御玉屋參詣之時分直酒井雅樂頭殿宇治平等院者
天台宗退轉之後從ニ先規一淨土宗住持職持來義亦淨土宗眞言宗兩
院出入具談話有圓滿院今以淨土宗數年寺役相勤代々居住
之所追立一色天台宗可レ成訴詔・僻事儀述給酒井雅樂頭殿尤圓
滿院非分也爰以重而增上寺所化俊學雅樂頭殿召而曰增上寺頓
譽上人宇治平等院儀苦惱思食故其方召申進少平等院儀
相更義有間敷也此趣增上寺頓譽上人可ニ申入一平等院訴詔・之
出家此地詰可レ有早々可レ登重而訴詔・之義者寺社奉行可ニ申渡一
也酒井雅樂頭殿被ニ仰渡一則俊學得ニ其意一平等院訴詔・之役僧旭
受菴長存呼酒井雅樂頭殿口上趣述彼知恩院之返報渡俊學長存
語曰爲ニ御老中一加樣之儀被レ仰義無事也是者增上寺御苦勞思
食故也遠劫相更事有間敷也平等院好時分有ニ訴詔・而末代
迄之一寺建立也云長存雅樂頭殿狀持宿所歸所寺社奉行衆以ニ
手紙一長存召長存寺社加賀爪甲斐守殿參雅樂頭殿如レ仰寺
社加賀爪甲斐守殿小笠・山城守殿長存早々可レ登訴詔・之段者重
而可ニ申渡一云長存仰隨而寛文七年九月登理得而慶同年

極月廿七日之日付而茶當從二原田利齋一井上河内守殿平等院
役僧可レ降先々訴詔可二申渡一也狀來故寛文八年申正月八日長存
又下則寺社奉行口上覺書平等院專譽給宇治代官上林所狀來
口上書覺宇治平等院鳳凰堂修覆之儀最勝平等兩院可二相勤一
之旨前奉行雖二申付一最勝院近年無住故從二平等院一致二修
覆一度之由依二訴詔一願之通可レ致レ之旨申渡候然共任雅意爲二奢
躰一不レ可レ仕若右之旨於二違背一者可二曲事一者也申正月廿七日矣上林所
狀右之文也則寫此方有爰以京都御奉行板倉問膳正殿雨宮對馬
守宮崎若狭守斷申京都町方町之年寄賴洛中之内奉加之數六
百冊及配奉加帳配出家者凉泉菴宗圓東向菴素閑養林菴
俊佐知學菴圓受林甫大坂者石丸石見守殿彦坂壹岐守殿斷則
江戸覺書見此寫留奉加合對以可レ成也矣大坂町年寄河崎屋宗齋
其外市川春齊奉加帳肝煎奉加帳配出家宗圓受英林甫了
夢誓運帳數四百冊配其節大坂天性寺而一七日專譽法談訓
讀之經文者觀經上品上生文則此經文者平等院鳳凰堂唐戸闔
闢白俊房色紙書故也本寺知恩院天性寺狀付故天性寺住持自
譽春花幷玄貞春夕肝煎佛心寺嚴譽賴壽同前門中長老何見
舞其外祐園如淸萬事肝煎大坂諸人門前市成參詣靈寶者
方丈而拜誠諸人夥敷事五畿内取沙汰也堺者水野伊預守殿斷
超善寺而靈寶一七日拜右之經文而說法奉加帳八十冊及配
靈寶緣記述事金受菴俊益養林菴俊佐是參詣之
諸人多先伐未聞云同從二知恩院一超善寺狀付故超善寺
住持親譽善仁寺中善締善秀善益何肝煎幷喜運寺
覺譽寶傳同隱居始門中長老何見廻祐園了夢如淸了念
小川淨祝庄兵衛十兵門肝煎伏見仙石因幡守殿斷三雲休地(カ)同
四良衛門以而緣次第奉加宇治之在所以レ緣六十餘州奉加帳遣公家
者近衛殿首武家者石川主殿殿始而貴賤道俗男女衆二十
方助緣一寛文拾年庚戌正月十一日修覆造營始大工者飛彈之工
近筋飛彈淸吉大工奉行者當所右方筋大工八兵衛瓦者宇
治源左衛門本尊直繕者大佛師弘甫唐戸闔之繪正面者
繪所左近先々繪寫改是書殘闔繕繪同人闔漆之繕發心
者是頓拮梗屋吉兵衛市左衛門七兵衛源兵衛金物之道具大
坂石鏑屋甚右衛門肝煎鳳凰堂巡石懸大坂石屋加右衛門壁
塗京市兵衛手傳長五良七衛門首平等院寺中長存俊益宗圓素
閑圓交(カ)俊佐知源善文存說何(カ)奉行右之以二職人一平等院十二世念蓮
社專譽俊童此成二修造一宇治平等院者爲二古跡一殊多載二書物一鳳
凰堂破壞令レ成二退轉一悲歎日本六十餘州之大小神祇祈誓阿彌
陀如來三世六方恒河沙諸佛來二守護一賴一故願望成熟彌過去
七佛五十三佛等如奉現在七佛未來七佛三世諸佛一切菩薩緣覺
聲聞衆南無歸命盡虛空遍法界一切三寶釋迦牟尼佛阿
彌陀佛觀音勢至藥上藥王普賢法自在師子吼陀羅尼虛空
藏德藏寶藏金藏金剛藏光明王山海惠華嚴王殊寶王月光
王日照王三昧王定自在王大自在王白馬王大威德無邊身之廿五菩
薩不動明王釋迦如來文珠普賢地藏彌勒藥師觀音勢至
阿彌陀阿閦大日虛空藏之十三佛大悲觀音大慈觀音師子無畏
觀音大光普照天人丈夫大梵深遠觀音之六觀音金剛願地藏金
剛寶地藏金剛悲地藏金剛憧地藏放光王地藏預天賀地藏之六
地藏善稱名吉祥王寶月智嚴音自在王金色寶光妙行成
就無憂最勝吉祥法海雷音法海勝惠遊戲神通藥師
瑠璃光如來七藥師彼土之開會諸菩薩大海衆及一切莊嚴相等

五百之羅漢八萬大衆八億八千衆上南中無歸下命　閻浮守護之三神大
天普救衆生妙德夜神妙德圓滿夜神五大尊之不動明王降三
世軍吒利明王大威德金剛夜叉五大力之金剛吼龍王吼無畏十力吼
雷電吼無量力吼守二護伽藍一之十八神守二護歸三寶人一之三十六天
守二護出家一之四王天多門・持國增長廣目八將軍四王三十二將
軍守二護五戒之人一乃五神東方阿伽多南方利帝魯西方須陀光
北方縛陀摩尼天神七代地神五代人王代々當所離宮八滿在所
中之諸神惣而神名帳載所三千七百五十餘社乃至山家村里小
社櫟社道祖之小神一切神祇等上南中無歸下命　淨土弘傳相承祖師三
國聖教述作自他宗之祖師一天靈地自他宗之祖師杲號弘通之他家
曩祖當院建立之時供養導師役人之僧衆當院開碁宇治
之關白藤賴通蓮華覺俊寂覺大居士同父母藤道長入道等之部
類眷屬主君。後一條院後朱雀後冷泉院三代之天子・部類眷屬道長
主君一條三條後一條院三代天子部類眷屬賴通公十二人之兄弟
教通師實師通等之部類眷屬關白俊房公部類眷屬佛工
定朝部類眷屬伽藍建立大工右方左方繪師爲成嚴屋塗師
瓦屋手傳役夫壁塗・鍛治惣而伽藍懸職人部類眷屬平等
院而功戰時計死之源三位賴政一門部類眷屬每二戰成一計死聖
靈當院淨土宗代々住持代々寺中之僧惣而有緣檀那前亡之聖
靈迄上今度鳳凰堂鐘樓樓門西大門再興修覆之依二功德一阿
彌陀如來之見佛增上緣護念增上緣滅罪增上緣攝生增上緣
證生增上緣之五種增上緣之象二利益一而當院從二建立一以來六
十餘州之貴賤道俗男女平等院之地踏所之衆生始而予父一門
部類眷屬母之一門部類眷屬當院每二破壞一入二奉加一諸人之部類
眷屬殊而者今度奉加入諸人之部類眷屬再興供養之法事
出家之一門部類眷屬供養廻向逢諸人之部類眷屬三界六道有
緣無緣修覆苦勞成諸人等之自他三業所修之依二善根一一切衆生
同一平等令レ得二成佛一亦現世者奉加入諸人七難消滅二遁惡事。災難一別而
者院內繁昌惡事遁二災難一當所繁昌而見佛門法人多盡未
來歲化益無窮而院內彌令レ成二威德深廣增進一者也仍而意趣
如件　追加
一唐戶闔觀經九品文爲二末代一寫取事伏見西岸寺第三世寶譽如半　同發心者
印淸成是末代之什物也
一堂內闔繪以レ損爲二末代一殘所之繪寫留繪所左近
一鳳凰堂者昔無二棟札一佛之胎內無二願成一但佛胎內蓮花丸座有
此上胎藏界之曼陁羅之梵字有無二別書記一
一今度奉加帳京都大坂堺伏見宇治近鄉江戶六十餘州記事千八百冊及
一本尊之三具尾川了淸奇・進今度成本尊面箔尾川了淸奇・進今度成
一賴政舊跡扇之芝石塔石墻江戶佐藤孫衛門奇・進
一鳳凰堂之鑰佐野道雪山村八兵衛鑰取號而雖レ爲二所持一鳳凰堂
修覆付今度專譽取上
干時寬文拾年庚戌五月

宇治平等院十二世念蓮社專譽俊章（花押）

先師檀譽之一字三禮之阿彌陀經納・幷昔賴通之時莊嚴・汇又者鳳凰之鳥
羽消故今度嚴屋繕其時鳳凰之鳥消タル金納置

淨土咒

南無阿彌多婆夜　哆他伽哆夜　哆地夜佗
阿彌唎都婆毗阿彌唎哆　悉耽婆毗
阿彌唎哆毗迦蘭哆伽彌賦伽伽那枳多
迦隸婆婆訶

大檀那本命元辰日本開闢以来代々將軍等
今上皇帝聖壽萬安天神七代地神五代人主代々一切神祇等
南方火德星君星斗日本開闢以来一切民
藤原道長入道寛弘七年十二月朔日　藤原頼通蓮華覺俊寂覺大居士延久六年甲寅二月二日
源空法然上人建暦二年壬申正月廿五日　大相國一品德蓮社宗譽道和大居士元和二年丙辰四月十七日
享德院殿一品大相國公寛永九年壬申正月廿四日　大獻院殿贈正一位大政大臣寛安四年辛卯四月廿日
崇源院殿一品大夫人昌譽大禪定尼寛永三年丙寅九月十五日
後一條院長元九年丙子四月十七日　後朱雀院寛德二年乙酉正月十八日　後冷泉院治暦四年戊申四月十九日
源三位建法澤山頼政大居士治承四年五月廿三日
關東十八ヶ所淨土宗檀林代々上人
當院淨土宗代々住持代々寺中僧
爲當院位牌石塔立其外有縁檀那乃至法界平等利益也

過去七佛

毘婆尸棄佛　毘婆尸佛
毘舍那　拘留孫佛
狗那含佛　迦葉佛
釋迦佛

現在七佛

南無寶勝像佛　南無寶王光焰照佛
南無一切香華自在力王佛　南無日月須彌決定佛
南無信威德佛　南無寶王月嚴妙音王佛
南無金剛堅固照惠散佛

未來七佛

南無治地佛　南無月光面佛
南無五百生佛　南無一萬八千金羅王佛
南無三千見釋迦牟尼佛　南無六千萬成就喜見佛
南無寶幢佛
阿彌陀五佛　阿彌陀如來觀音菩薩勢至廿地藏廿龍樹廿
釋迦五佛　釋迦如來　普賢廿文殊廿彌勒廿觀音廿

(7) 明治已來ノ略誌　一枚

竪一尺八分、横一尺五寸三分の奉書に、明治十年の兩陛下臨幸より明治二十八年の修理に至るまでの略誌を墨書する。

明治已來ノ略誌

當山鳳凰堂其他伽藍境地等ノ履暦沿革ハ舊記ニ昭々タルニ依テ記セス
玆ニ文明開化ノ秋ニ||テ忝クモ　天皇皇后兩陛下臨幸在マシ・堂宇・明治十年二月ナリ
寶物等親ク　天覽ニ供シ奉リ爾來　皇族貴顯ヲ始メ外國人ニ至ル迄
縱覽ヲ乞フ者絶ヘス尚將來保存ノ爲メ金一千圓又修繕費七百圓ヲ
内務省ヨリ下賜シ玉フ也既ニ客年米國シカゴニ於テ萬國博覽會ノ際ニモ
當山鳳凰堂ノ美術功尚ノ畫圖ヲ同場ニ掲示シ萬國一般皇國美術構
造ノ模範タルヲ知ニ至ルナリ今乎平安遷都　桓武天皇一千百年
紀念ノ大祭典ニ際シ當山伽藍破損所少ナカラス依テ管理者幷ニ信徒總
代・脇・議ヲ決シ府廳ヘ修繕出願ニ及ヒ明治廿八年二月　同年四月許可ヲ得テ直ニ佛工番匠
修繕ニ着手ス尤モ古色ヲ失ワサルヲ要ス又當府知事渡邊氏ヨリ京都美術校長
今泉氏ヘ修繕檢査ヲ依託ス依テ同氏ノ來往屢々ナリ日ヲ追テ修理漸ク成ル
甘八年四月十四日ナリ玆ニ於テ俊・劫・式ノ大法要ヲ執行シ尚佛法興隆正法弘通
天皇陛下聖光增益文武百官忠威培增國土安穩萬民豐樂ノ
祈願ヲ脩シ奉リ畢ヲ大略近誌ヲ錄スルコト如件

明治廿八年四月十五日　平等院管理
淨土院住職

大門了康
同
最勝院副住
三浦道海
同
信徒惣代
井上豹太郎
岩井勘造
長井耕雪
服部鐵之助
皆川迢藏

(8)　請負高書　一枚

竪一尺八分、横七寸の奉書に、明治二十八年修理の際の總請負高を墨書する。

今回惣請負高

金八百五拾四圓四拾錢也佛工大工トモ　佛工司　京都山本茂助

其(カ)收入　同　〃田村庄七

一金四百五拾四圓四拾錢修繕金之内ヨリ支辨　大工　宇治松本傳治郎

一金三百圓也　京都市豊年會(カ)ヨリ下賦

一金壹百圓也　浄土院信徒ヨリ寄附　右之通

已上

明治廿八年四月十五日

(9)　銀杏樹葉　五枚

五葉の端を楮紙でくくるが、おそらく寛文修理のときに、防虫のために入れられたものであろう。

（昭和三十年七月十日）